

# 方向

第八五号 一九八八年六月三〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

孤山雁信

一赤谷明海書翰集一 (二九)

原田憲雄編

★1983.12.14.原田憲雄宛。手紙。封筒墨書。

この程は「四科」についての御教示有難うございました、電話で申しあげていた判らないことは、同封コピーの赤傍線の部分です。修飾の美辞に迷い、引用の故事にふり廻されているらしく、満足のいく解釈をつけかねています。教導にあずかれれば幸いです。

コピーに問題の箇所に関係する校異を赤字で添えました、対校表とあるのは目下作業を進めている校訂の表ですが、かき張りますので出来上がった段階で持参します。

尚補記分というのは、仏教全書本『日本高僧伝要文集抄』第三の聖武天皇伝と光明皇后伝とにのみ見えるもので、要文抄の作者宗性の自筆原本にはない部分、それは江戸中期に水戸藩使臣の東大寺史料採訪の結果、宗性の抄出に洩れ、且つ『東大寺要録』には採録されているものを一緒にしたと思われるものです、コピーで見られるように仏教全書本はその補記分を(ハ)で示しています、今判り易いように「」で示しました。

年末のこととて何かとお忙しい事でしょう、これは年内に御返事賜りたいとの意味ではなく、何時でもよい事ですから、お手すきの折に調べておいて下さい、先は要用のみ、十二月十四日 明海 原田憲雄様  
へ同封のコピーを二頁、三頁に掲げる。紙面が小さいのでコピーの全部は収まらない。了解されたい。編者へ

兜敷

仙教全書目本

日本高僧仙要文抄第三

補記分(7L内)

左。印口封表記載分  
右。印口不用

五六頁

己。皇后以勝寶六年於東大寺大佛前伏膺和上暨真  
受戒并戒。并行願莫不自資營。未來劫行并行有情界  
盡我願乃休。仁政皇后又添六宗存本取利。請上名德  
敷三乘教。即張大教網。在生死流渡。人天魚籃。涅槃  
岸。大哉解脫服。無相福田衣。被奉如飛行。廣利諸天人天  
平仁政皇后累天靈淑。靜履幽閑。南無慈仁。感願斗之  
飛電。靈微成。覺昇。陽山之紫雲。是乃業蹟與。王功參。撥  
亂。德超父母。道峻。堯。豈伊獨有。瑠璃合風。  
葛覃流。積木無芳而已。自天平賈字某年六月七  
日。冥覆上昇閻官。長向。請。自。豈留金  
板。其年不悉。云。已上。

説  
撰  
跋  
門

此  
口

(勝寶夏感神聖武皇皇帝並皇后傳)

同遊寶刹。又願太上皇太后皇太后皇太后皇太后皇太后  
子以下親王子大臣等同實此福。俱到彼岸。藤原氏先後  
太政大臣及皇后先妣從一位橘大夫人之靈。恒奉先  
帝而陪遊淨土。長領。後代而常衛。建朝。乃至自古  
已來。至於今日。身爲大臣。竭忠奉國者。及見在子孫俱

願所造竝已成。又於古金鐘寺造東大寺并蓮花藏  
世界盧舍那佛。奉造盧舍那佛像。結跏趺坐高五丈二尺  
四寸。肉髻高三尺。自髮際至頂七尺。自眉上至髮際  
一尺九寸三分。御眉闊一尺一寸。御目長三尺九寸。御目  
間一尺六寸。自目至眉八寸。自鼻前至眉間四尺五  
寸。人中長八寸五分。御面廣九尺五寸。御頰長一尺六  
寸。御手長八尺五寸。御頸長二尺六寸五分。御肩長二丈  
八尺七寸一分。御肩長五尺四寸五分。御胸長一丈八尺。  
御臂長一丈九尺。腕至腕長一丈五尺。御腹一丈五寸。掌  
長一丈六尺。中指長五尺。中指長二丈三尺八寸五分。膝  
前長三丈九尺。足心長一丈二尺。厚七寸。  
合御體表裏五千七百四十尺

百十八斤二兩。自勝寶二年正月造。  
右奉鑄尊像御體所用鑄銅  
御螺鈿九百六十六箇。長一尺二寸  
斤十二兩。十兩。  
右始鑄寶元年十二月造。  
尺七寸。基周廿三丈九尺。一重。  
錫周卅四丈七尺。敷華下周卅九  
合御體表裏五千五百六十  
千九百廿九斤九兩白銅二  
以前八歲七月以往行事。且勘注  
高十五丈。殿鋪東西石敷。四十一  
身高五十二尺九寸。座高一丈八  
尺四寸。左右挾持菩薩。及四天  
女。周廊鳳刺門。棧門屋講堂。食  
居禪室。客居院。空閣佛像。事。關  
華。書一切經數部。鑄銀身圓八  
十夫用壯。金盤遊振。刺輪長息。  
萬人。造無垢衣。方領。飯。信。方口  
供僧造寺。兼六宗講料。存本取利。  
安居。又造像。無金。地。殿。并。麗

障  
跡  
口

甘有一寶山與翻浮提為  
一五由旬南方碼礫山出  
銀山出海上海二十五由

口於新羅使之上又勸  
切處運有至被披三致殿  
吧九經三史架別藉殿厨  
少高顯御座莊殿少勝厨  
御披釋與殿于顯效殿麗殊  
異香莊校御座高廣倍勝  
下有巨徑殿以達來山上  
紅願製寶莊飾樹花中一  
以文王其殿諸雜木結點  
一諸工巧皇帝又勸摸取有  
於香殿中以記送道大使  
循禮胡高拜銀青光祿大夫  
拜銀青光祿大夫秘書監及  
皇帝御製詩送日本使五言  
余儀儀遠於爾長途遙漲  
彼君子王化遠昭特差鴻

贈大卿將挑送至揚州看取發別摩准南勸處致使  
魏方進如法供給送道其大使私請揚州龍興寺鑿真和  
上等渡海將傳戒律自勝寶六年二月四日至聖朝勸

斯寶帝代勝殿前王翠達其佛法進即休道宜律師行  
事抄六卷大覺師抄批義記十四卷思託即傳大脈無違  
殿本文沙門法彌珠密岳鎮國道場義記三本助天景  
井之揚化聖武皇帝宜唐帝錢天受隆圖德副乾坤明  
均日月化家為國志康富雨之長夏香承天果熟經  
論之業六龍成御八表惟寧推說垂仁德大明而下獨  
顯流拱代夢香行而上身万德長綿莫妙空觀百神曲  
贊永隔軒臺天平仁政皇后克蒸洪福不垂秋光想空  
心於佛乘申景福於仙鶴劍挂金地而未異功克日  
就功忌辰赴慶奠我列聖憑斯正因妙業增隆開  
化運於淨國玄珠契道獲大寶於春池浴不盡之威靈  
垂無疆之福祐勝寶八歲次丙申五月二日崩於平城  
宮矣已上唐  
書文

父入市教儲買人用於稱尺于時日本未行稱尺新  
從大唐得稱尺所以皇后入市教人用稱尺又作又  
日汝當助國宜風律衡稱尺非久各流天下後帝納

焚庭園嚴風利性極劇日峯殿變空妙閣雙閣迴歷月  
殿香風四起更落天花前後光耀燦花高計厨餐香  
孩佳騰千般召請稍衣鑿帶管錫俱侍貝葉觀演寶  
花於是殿攝羽沐蘭質於慈風齊賓士騰道柯於  
道樹法王應供五罪之具田刊焚香越六鉢於海岸  
兩行無梵各引龍泉之延廊亦四廟用接菩提之軌在  
勝以加加唯招雲之所成伏願勝攝亦遠涉淨居寂仙  
雲於危梵究竟福善會無上道即天平仁政皇后之能事  
也皇后又造香山寺金室佛事莊嚴具足東西扶掖  
影帶左右危觀虛敞雅麗難名皇后又造香藥寺九  
間佛殿造七佛淨土七經塔在殿中造塔二區東西相  
對結一鐘口住僧百餘僧房田園食料皇后又立藥院  
拾諸病苦皇后又給料供每年受戒十師經云施藥  
至末劫時不逢疫病劫施食不逢飢饉劫皇后會慈  
敬二田興建三寶具四不壞信修五分法身財敬  
供養正行供養三輪淨淨無希求惟為利他不專為

1 印  
1 印  
口印  
續々  
東大寺  
寺  
寺  
寺  
寺  
寺  
寺  
寺  
寺  
寺

復柯  
樹  
樹  
樹  
樹  
樹  
樹  
樹  
樹  
樹

★1983.12.29.同宛。葉書。

方向第二七号本日到来拝受しました。歳末で何かとお忙しいのに態々お送りいただき恐れ入ります。このところ甚だ寒い日が続きますがお変わりありませんか。此方は防寒具に身を固めて家の内外、平素掃除したことのないところを丹念にホジクついています。生来こういう事に向いているとみえ、僧録の校訂作業よりは身が入ります。正月まであと二日、この葉書が着く頃には年を越しているでしょう。ゆっくりお正月をお迎え下さい。十二月二十九日夜

★1984.2.21.同宛。葉書。墨書。

方向廿八号只今落掌仕候毎々貴勞を煩し候条恐縮に奉存候昨日より陽氣俄に発動、早速に柿の木に登り旧枝を剪除致し居り候。杉田兄明日手術の由、いずれ又見舞いに出向の心算に御座候。二月廿一日午後二時

★1984.8.1.同宛。葉書。

暑中もご無沙汰、残暑の御見舞も申さず失礼を重ねていますが恙ない事と存じます。過日尾鷲の安藤智純氏来訪、同組内の橋浩文（龍谷大学同期生）より聞いたと「わが友に戒律宗の沙門あり少女を見ればうち嘆きける」の一首を示しました。これは確か貴兄の作とNBL（龍大予科時代の会）記念誌に当たりましたら釈枯魚の作として出ていました。続いて出梨葉歌（高田（益雄））の歌があります。淋しいもの、「はらからよ」は辞世歌の感があります。気違いじみた暑さがまだ続いています。精々御身大切に、

★1984.10.11.同宛。葉書。

拝復 毎々厄介なことを申し出て恐縮です、御教示により仏教語大辞典も見ましたが「あらゆる」以外の解釈はなさそうなのでそれに従いますがなお一抹のひっかかりが残ります、思託が靈祐の執筆動機について「於講解之次諸有學者請出斯文統前所無」としているのは「あらゆる」で通るのですが 印の句が靈祐の自序からの引文ですので、謙虚さを欠いた靈祐ということになります、「多くの人が言いますので」「ぐらいに使っていると思うのですが」東森君心筋梗塞で入院していた由、明日ついであるので様子をみてきます、冷涼が時には寒すぎたり、風邪を召さぬよう御用下さい、

★1984.11.28.同宛。葉書。

本二十八日御手紙拝受しました、早速にコピーをいただき有難うございます、感通録と法苑珠林の二文、全く同文、いずれがいくら探ったかはにわかには判じ兼ねますが、阿育王塔発掘の劉薩訶が涼州山開出像の予言者と同一人物であることがはっきりしました、御世話になった甲斐がありました、伝説の中で何百年も生きたことになりませんが、余程唐土では有名人だったのでしょう、先は急ぎ御礼言上まで。

★1985.3.16.同宛。葉書。

雨が多くて雪にならないところが暖い理屈なのでしょうが、膚の上では何時までも寒々しく、春の到来がおそいとかかっています。それでも山茱萸が咲き出しました、三株あるうち一番晩咲きの軒端の紅梅も咲きかけています、お宅の庭もだいぶ花やいできたことでしょう。先日は破理書のご迷惑をおかけしました、あのあと表面だけの解釈に終ったところが多々ありましたがそのままにして送り返しました、坪井（清足）夫人が広東

方面で入手した数冊の内だそうで、興味があれば他のものをこの事でしたが、興味は全然ありませんことわっておきました、綾村先生の近著「文房四宝の基礎知識」に毛詩の静女章が引いてあり、どう訳したらと思つたところ、「方向」での貴訳に接しました、この間奈良博物館でばったり東森君に会いました、以前より元気そうでした

★1985.4.4.同宛。葉書。

風邪大事に至らず恢復の御様子大慶に存じます、小生の方まだ余韻孺々というところですがもう心配はありません、方向三九号御恵投拝読、あの生臭い兵隊手帳に代り、慶さんのすずやかな文章が登場、方向の品位が上つてきました、それにしても「甲の長さが三〇センチほどの亀が三匹」とはデツカイものがいたものですね、ヘーランカーの岸辺で」の～びるしやなの精緻な考証に驚嘆しています、関連の文献をどのようにしてひねり出すのか、そのコツを伝授してほしいなと願っています、此方は神津カンナの母の名を思い出すのに家内と二人がかりで二日を要しました、頭の記憶装置がバラバラになったようです、拙宅のれんぎょう真盛り、余程うまいとみえてヒヨコが食い荒しています、四月四日

★1985.4.28.同宛。葉書。

若葉が伸びて庭の木陰が濃くなつて参りました、その蔭におくとひらどつつじの花がひとときわ鮮やかに映えるようです、その後お変わりありませんか、此方はまだクシャミをしています、それでも時節ですので草ひき、土おこし、植付と畑の仕事に追い立てられています、方向四〇号頂戴しながらぐずぐずしてやっとな読み了えました、

へ「ランカーの岸辺で」での佐藤、宮坂両氏の引用、なかなかややこしかったですが、アスラがインダス文明の創始者との要点だけは理解できた積りです、有難うございました、二十八日正午

★1985.9.8.同宛。葉書。

昨日は参上、御清閑を妨げ恐縮に存じます、帰途バスにゆられていると記憶装置がつかって法進という名が浮んできました、法進を忘れるくらいですから、そのうち思託も憲雄も出てこなくなるのではと懼れています、頂戴した桃、途中で痛んだのではと開けてみると実に念の入った包みよう、無事山の神の宝前に披露できました、そちらの神さまにお礼を伝えて下さい。暑いなかお大事に。六日朝

★1985.9.26.同宛。手紙。封筒墨書。

彼岸が過ぎ、さすがに涼しくなってきました、さくろの実が破れ、柿も色づき出しました、その後お変りない事と存じますが如何ですか、森田君から院展の特別招待券が送られてきました、そちらへも着いたのでしよう、小生はテープカットが残り少々波が引いた頃を見計って出向く積りです、

時に又お願いがあります、御教示願えれば幸いです、

例の思託著作逸文の中に道岸律師の伝があり、その一部に次の文があります

神儀儀挺挺持持朗朗目目威威頌頌恒恒戴戴帽子帽子入入朝朝帝帝重重  
親親躬躬櫛櫛(指カ)初初受受戒戒時時夢夢見見聖聖十十大大弟弟子子

来爲受具足戒大唐孝和皇帝十縁之  
一敷也

右の中、孝和皇帝（中宗）の十縁の事が旧唐書か新唐書などに出ているのかどうか お暇な時に当たってみて下さい、十大弟子を夢に見たのは恐らく道岸でしょうが そのことが十縁と何のつながりがあるのかはつきりせず、或は前段の帽子入朝、帝親躬擗につながるのか、その辺のところは十縁の話が判ればはつきりするのですが、御迷惑をかけますがよろしく願上げます 九月二十六日午後 明海 原田憲雄様

★1986.1.10.同宛。手紙。封筒墨書。

御機嫌よく新年を迎えられましたか とても寒いこの頃とて神経痛に響くのではと案じています、ところで先般お邪魔したとき鑑真和上逸文集成をお目にかけましたが 国書逸文研究会例会用のレジユメ作りの段になって大事な逸文の脱落に気づきました、追加をお送りします。レジユメもつけておきます。但しこれは発表者のメモのようなもので、説明ぬきでは判りにくいでしょう。先は要用のみ 一月十日 明海 原田憲雄様  
（同封の「追加」と「レジユメ」並びに次ぎの手紙に同封された『国書逸文研究』は省略する）

★1986.7.11.同宛。手紙。封筒墨書。

梅雨冷えというのか、今年の梅雨はひいやりした日が多かったのにここに来て急にむし暑くなり、豪雨やら雷鳴



やら、梅雨あけの前徴がみえてきました、神経痛にはどちらがこたえるのか知りませんが、本格的な暑さの到来が近いことは確かなようです、お互に暑さにバテぬよう気をつけましょう、

以前お目にかけて鑑真和尚逸文に覺書をつけて発表したものへ『国書逸文研究』へが、やっと出来てきましたので御高覧に供します、後日お目にかかった節忌憚のない御批判をいただければ幸いです、

週一回の律宗綱要輪讀にかなり追い立てられてきましたが、竜大が夏休みに入りましたので九月下旬まで開放されることになりやれやれです、例により慢々の歩調ながら夏中には思託年表を仕上げたいものと思っています、

いずれまた拜眉の上万々 七月十一日 明海 原田憲雄様

★1986.8.26.同宛。紙包のうえにエンピツで書いて、それをXで消してある。これが原田宛の絶筆。

突然に参上しましたら御不在、残念ですが戻ります、

同封のものへ『中外日報』1986.7.2,4,7.掲載の横佐智子「鑑真和上と葉の道」へ東森君から切抜きを貰ったのでついでにコピーしたものです、こんな人もいるのだなというお知らせまでに。桃は山梨産、(コピー省略)

※赤谷明海氏の寂後、その書翰をとりあえず活字にしておこうと思つて、紀美子夫人の許しをえてとりかかった

「孤山雁信」は、氏を敬愛する方々の支持と援助によつて、ここにそのひととおりを了えることができた。まだ他にも出てくる可能性があり、排列や写誤の訂正など、なすべきことは少くないが、これで連載を一応おわる。

編者名を「原田憲雄」としたのは、この作業に過誤や不都合が生じるとすればそれはすべてわたしの責任であることを明らかならまでで、他意は無い。お借りした孤山の書翰は、森田曠平氏宛以外は、全部すでに持主にお返

しした。森田氏のは、その指示により、わたしの所持とともに、紀美子夫人に贈り、孤山文庫のようなものができるとき、そこに保存されるよう、お願いするつもりである。

長いあいだ、励ましてくださった読者の皆様、また、さまざまの便宜を与えられた方々に、一々お名前はあげないが、ここに謹みて、あつく感謝いたします。ありがとうございました。一九八八年六月十四日 原田憲雄

杜笙・和田利男『雲云』

と

臘梅』

1988.6.11. 原田 憲雄

「俳句のある随筆」

古い来翰を整理していたら、一九五七年六月十八日付の和田利男氏のはがきが出てきた。氏の論文「李賀の鬼詩とその形成」を目録で見、掲載誌の『群馬大学紀要』を手に入れたく、同大学に照会したところ、紀要の係から回付された。それで、抜き刷りを送ったこと、代価・送料等は不要であること、などを示されたのである。鄭重で、簡潔な文章だった。

これが今日に続く三十年の交宜の最初で、以来恵投された「唐代に於ける詩と伝記との結合」「杜詩事類索引」などによって中国学の精到な研究に敬服していたが、雑誌『図書』で「漱石逸句」を読み、氏の関心が中国にとどまらぬこと、戦前に京都の人文書院から出た『漱石漢詩研究』や戦後の『漱石のユウモア』の著者が氏であることに想い到了。しかし、季刊誌『桑珠』を主宰し一〇〇号を越える、俳句作者でもあることを知ったのは、つい数年前。

いま、その「俳句のある随筆」の集が編まれ、余恵がわたしにまで及ぶのは、ありがたく、嬉しいことである。「昭和六十二年孟冬」の日付のある「はしがき」に次のようにいう。

また随筆のようなものを出してみませんか、と最初に言い出したのは、東京で出版社をやっている三男であつた。「売れはしないよ」と私が言うと、「わかってます」と笑顔で彼は答えた。：／「編集は僕がやらせてもらう」と次男が言い出したのは、その話を聞いてすぐである。／十月の末に彼が資料を抱えて来て編集の方針を語り、原稿の分類・排列の説明をして、目次を示した。：わたしが第二句集『朝虹』を出して十年も経つのに、その後、句集を出そうとしないから、：俳句のある文章を多く採って特色を出してみようと思うのだと。：／内容は五類に分けてあり、「その一」は主に俳誌『桑珠』巻頭に載つた俳句のある短い随筆を収め、「その二」は同じく俳句をテーマにした小論、感想および添削実例、「その三」は既刊の『文苑借景』『漱石の詩と俳句』『子規と漱石』『漱石雑考』等から一部抄出した俳人論を収め、「その四」「その五」は共に俳句に関係のない随筆を集めたのであるが、中でも「その五」の方はやや学術的な評論を据えてしめくくつてある。／また口絵や扉に私の描いた絵を入れたいとのこと、拙い作品なので躊躇したが、結局それも恵子に一任した。：

その扉絵や賛などによって、氏の才芸が文学の境外にあふれ、無声の詩といわれる絵画はもとより、有声の謡曲にまで及ぶことが伺われる。

旧中国では学者は、ほとんどすべて文人でもあつた。文人というのは、詩文を作るだけでなく、琴棋書画、

すなわち音楽と美術と高尚な遊戯とを、あわせ嗜まねばならなかった。中国の文化をうけいれた朝鮮や日本も同じで、夏目漱石が書画を揮灑し、謡曲を吟じたのもそれだったといえよう。いまでは学界も文壇も様変わりし、専門化がすすみ、学者と文学者とが分かれ、文学者のなかでも詩、歌、俳句、小説、評論のそれぞれが別の城にとじこもって交通が乏しい。そんな状況のなかでこの一冊を読むと、学者にして文人という東洋の文化の一伝統が、氏においては途絶えずに体现されている、といった感慨をおぼえる。

さて、俳句添削実例「私ならこう詠む」につきの一節がある。

さくさくと氷切りをり榛名富士　〈原句〉

句会にこの句が出された時、氷と榛名富士との関係がわからない、という批評が多かった。この氷が榛名湖の湖面に張りつめたものであることを推察しろというのは、このままの表現では無理かもしれない。榛名湖の結氷することを知らない人にとってはなおさらであろう。そこでこれを、

さくさくと氷湖切りをり榛名富士

とすれば、一応この問題は解決できる。しかし私にはまだ物足りない。湖面の広潤な感じが出ていないからだ。そこで「湖水」を「氷湖」としてみればどうだろう。湖の氷を切るのではなくて、氷れる湖を切るという表現である。すると、対象が豁然と開け、スケールがずっと大きくなりはしないだろうか。

さくさくと氷湖切りをり榛名富士

(参考) たてよこと氷伐り行く人数かな　　広江八重桜

蒼天へ積む採氷の稜ただし 木村蕪城

一字を添え、一字を置き換えるだけで、同じ風景がなんと生動することだろう。

文中にもあるように、歌会や句会では「わからない」とか「よくない」といった批評は出るが、ではどうすればよいかを教えてくれる人は少ない。どうすればよいかを教えてくれても、そうすることがなぜよいのか、まではめったに教えてもらえない。物惜しみするのではなく、教える人もそこまではつきり筋道立てて見極めてはいないのが普通なのだ。「よくない」といわれるだけでも勉強になり、あとは自分で工夫すればよい。ただ教える側の感性が鈍く見識が低いと、教わる人を誤る。それが案外すくなくない。

氏は感性の鋭く見識の高い人である。世人のあまり問題にしなかった宮沢賢治の童話を一九四五年に偶然手にとって驚き、四年後に『宮沢賢治の童話文学』を出している（『文苑借景』）のや、見る気もなしに見ていたテレビの創作舞踊「長嶺ヤス子の曼陀羅」にひきこまれ、「鬼気はらむ悪女曼陀羅春の闇」に始まる一文を書いている（本書）のは感性の鋭い証しであろうし、一九七一年刊行の郭沫若「李白与杜甫」が杜甫を統治階級的立場にたつ者として非難したのに対し批判論文を書き（『杜甫』）、「無名の作者にも時としてすばらしい句が生れ得るし、有名大家の句にも取るに足らぬ凡作の方が多いものである。：名は虚であり、作品こそが実である。虚にあこがれることなく、実を創る力を養うべきである」「芭蕉の言だからといってそれを神聖視するのは誤りである」（本書）というのは見識の高さをしめす。

この感性と見識は、天成の素質にもよろうが、半世紀をこえる長い研究者・教育者としての生活を篤実に励む

ことよつて鍊磨せられたものに違ひない。七十過ぎても「利ちゃん」と呼んで親愛する宮本恵一氏のような友、懸賞小説には当選させなかつたがユーモア小説を指導した佐々木邦氏、雑誌『新風土』に寄稿を勧めた下村湖人氏のような先達、勤め先での同僚にも、教え子などにも親切な人々をえたことも、これを大いに助けたであろう。と、推察される話が、あるいはユーモラスに、あるいはしみじみと随筆に描かれていて、「幸福な方だなあ」と思うが、氏の心をこめた付き合いかたに接すると、相手も心をこめ、篤実であることを学ばざるをえない、といつた消息も感得される。

前著『文苑借景』に「母」と題するすぐれた文章がある。本書にも夫人をはじめとする親しい方々にまつわる話があり、さらりと書いてあるのに、目頭があつくなつた。

親子、兄弟、夫婦といった間柄の者は、近過ぎて相手の見えないのが一般で、釈尊が、成道後はじめて故郷に帰つたとき、人々はまともに話を聞こうとせず、イエス・キリストも、生国では貧乏大工の息子としか扱われなかつた。夏目漱石は、夫人や子息の追憶では、きむつかしい愛人といったところである。無理もなく、第三者からとがめだてなどできるものではない。ところが和田家では、みなそれぞれに独立独歩しながら、杜笙先生を敬愛し、その子らからの父母への批評として、この一冊が結晶したものらしい。夫妻の歌と句で拙文をしめくくる。

あらそひてわがゲートルを巻きくれし子らの居らねば独り巻くなり 杜笙 (本書「古い歌稿から」)

栗剥くや踏まへて痛み葉草履 すみ子 (『桑珠』一一二号)

面挙げて臘梅よ光る雲を見よ 杜笙 (本書「はしがき」)

カメレオン

1988.4.20.

原 田 慶

カット 原田道子

『ここで待っててね』と言ってヨーコはおじいさんの家へ帰って行った。ヨーコは東京からやってきて、おじいさんにあずけられた子どもだ。

待っててねと言われた子どもたちは、ヨーコのおじいさんの家を見上げて、顔を見合わせた。おじいさんにみつかるとおこられるから、ともヨーコは言ったから、大きな声で呼ぶわけにはいかない。

みんな学校のかばんを持ったまま、こんなに遠くまで来てしまったことに、今更うしろめたさを感じている。ほんとうならもうとくに家に帰って、味噌のはいった焼きまんじゅうくらいはもらっているところなのに、なんだか不安で空腹も感じない。

ずいぶん待ったような気がするのに、だれも出てこないし、おじいさんの家の高い杉の木もしんとして、だんだん日が暮れてきた。

田植がすんだばかりの田がずつとつづいて、時々つめたい風が吹いてくると、カエルが、思い出したように、グググッとひくい声を出す。

『ヨーコちゃんこないねえ』

『おじいさんに、みつかったんじゃないのかなあ』

『暗くなるよ、もう帰ろうか』

子どもたちは、ふり返りふり返りしながら帰りはじめた。また長い道を歩かなければならない、家に着くころには日が暮れる。しょんぼりして、ものを言う子もない。



『ヨーコちゃん、指切りしただろう』

四角の平べったい鉛筆で、金色の目盛りがきざんであるのを、ヨーコは東京から持って来た。教室でとなりの

川に向かい側へ帰るには、川の上流にある橋まで崖の下を歩き、橋を渡ってから、もういちど川に沿って田の中の道を下らなければならぬのだ。それを思うだけでもみんな、気がおもくなった。

朝になってみんなが学校へ行くとヨーコもなにくわぬ顔でやってきた。

『ヨーコちゃん、きのうどうした』



席に座った子どもが、自分のおもしろくない、ただの六角形の鉛筆と、とりかえてもらったものだから、みんながとりかえてほしがった。

『いいよ、いいよ家にいっぱいあるんだから』

とヨーコは言った。それからいく日たってもヨーコは鉛筆を持って来なかった。だからみんなが家までついて行ったというわけだ。

『約束だからみんな運動場へ行こうよ』

先にたつて行くヨーコの後からしかたなくついて行った子どもたちは、もうほんとうにがっかりしている。

『さあみんな、ここへ唾をはいて』

『ほんとなめるのかい』

『約束だからほんとうになめる』

指切りげんまん、うそついたら睡なめさせる、と約束してあったのだ。まさかと思って、誰かが唾をはくと、続いて何人か唾をした。ヨーコはその上に腕立て伏せのしせいになって、細長い舌をべろつと出すと唾をなめた。

『うんめえうんめえ』

『やめなよ、おなかいなくなるぞ』

『だいじょうぶ、ああうんめえ、あんたもなめてみな』

三角のあごのどがった顔で、背が高くやせぎすのヨーコは、つきつきに唾をなめて、ベッベッと砂粒をとばし

父の日に

1988.6.19



V I V A C e

原田道子

た。初夏の陽射に白い運動場が、ぐらっと傾いて、はいつくぼったヨココの中から、だんだん透明になり、青く光ったと思ったら、ふいに子どもたちはみんな溶けて、カメレオンの腹の中に流れおちた。

## 夜明け

早起きな雀達が さわぎ疲れて

一休みする間

ひとときの静けさに ハトのあたやかな声か  
あらゆる動きを とめたかのような世界を  
しんしんと ゆりうごかす

止まった時間の中に

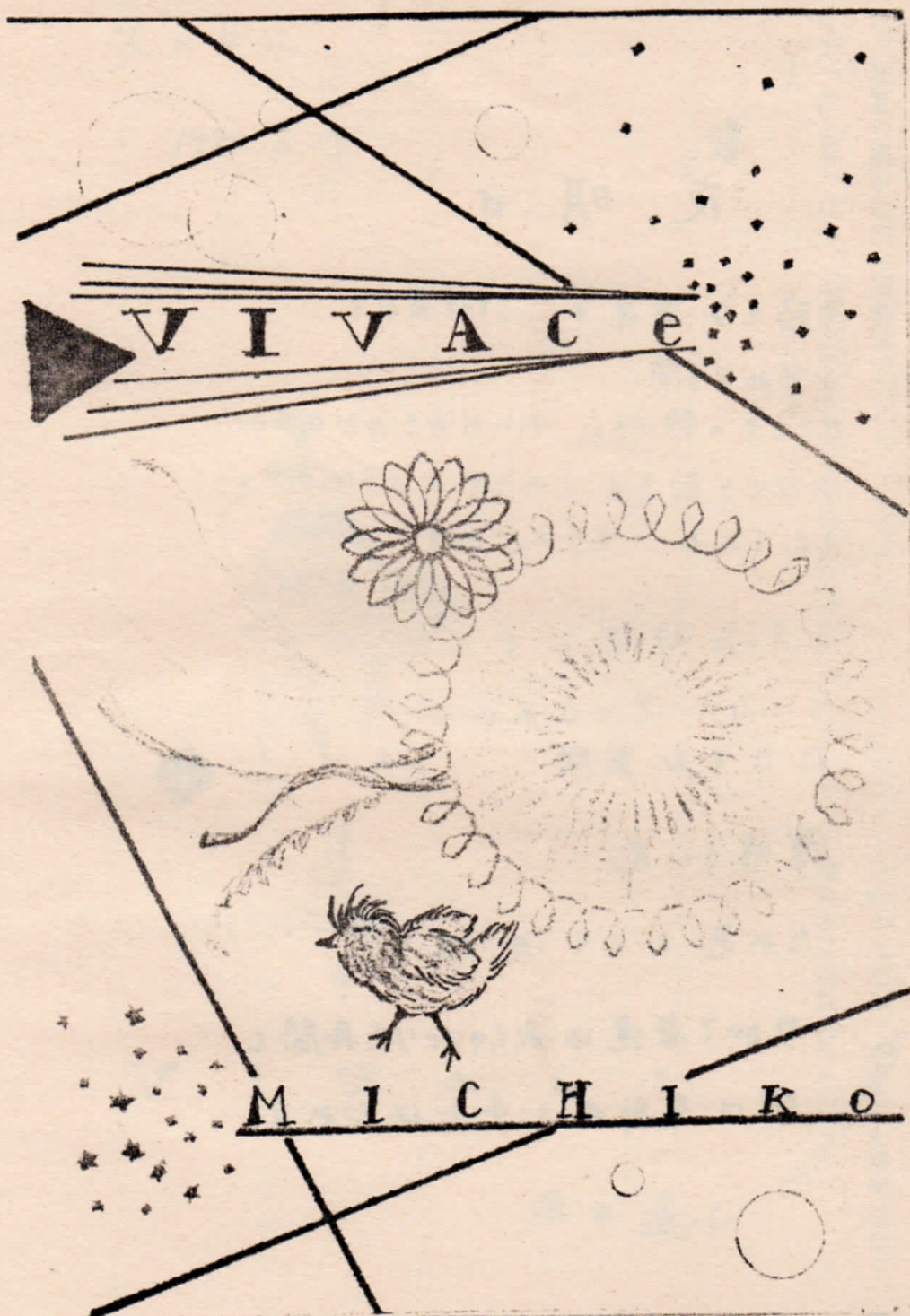
音もなく 浮かびあがり  
たたずむ空間

薄明るい光

ため息をつく 地球

やかに雀達は おしゃべりを再開し

街は常動曲を奏で始める



# 数 学

説明している 先生の言葉 が  
のろいの言葉に すら 聞こえる

代 数 幾 何      基 礎 解 析

微 分 積 分      確 率 統 計

ただ通りすぎるためのコトバ スラッシュ

ラジアン      ベクトル

指 数      無 理 数

理解する間もなく 頭から流れ過ぎてゆく  
公式

そして彼女の身は 隣りの教室の  
世界史の授業に向けられる

彼女は遠き 百代ヨーロッパに思いをはせる

フノッス宮殿      古代バビロニア

アレクサンドロスの遠征      ゲルマン人の大移動

チャイムが鳴り      空白の50分が

けたたましく      去って 行く

## In The Dark

日も暮れて 家にたどりつき  
さくま開けると

藍色の風景に 白いあじさいが  
浮かんでいた

あんなに見事な花を咲かせてくれたのに  
昼の明ること 日々の慌ただしさに  
六月があじさいの季節であることすら  
忘れていた自分に 気付く

今年はいつまで咲きつづけるのか

初夏の雨の花

「ボサツたちが、ピクや出家者さながらに、林に住み」というのは、「ボサツ」がもと、ピクすなわち出家得度して具足戒を受けた修行僧と *samana* (さながら、同一) でないことを示す。そうしてそのうえで、ボサツのなかには出家得度のピク同様の修行形態をとる者もいる、と言うのだ。ボサツには、こうでなければならぬという形態の制限はない。その時、その場に応じた姿かたちであればよいのであろう。ただ、「その時、その場に應じた姿かたち」と抽象せず、一々に描いてゆくのが「法華經」のやりかたである。それを煩わしく感じる人もあり、効能書ばかりで中味が無い、とそしつた江戸時代の排佛家の言葉も、無理とはいえぬが、理屈の苦手な熊さん八さん、お花お松には、講談のような説教であればこそ、なるほどとうなずけるのであり、インドの人々は、江戸の連続講談よりもはるかに長い、叙事詩の吟唱を好んだ。

五神通とは、仏・ボサツなどがもつ五つの超人的な力で、①どこにでも自由にゆける「神足通」 ②死後の世界を見通す「天眼通」 ③一切の言語・音声を聞ける「天耳通」 ④他人の心を知りうる「他心通」 ⑤前世を知る「宿命通」で、これに⑥煩惱のなくなったことを知りうる「漏尽通」を加えたものを、六神通という。

宿命通は、梵語では *purve-nivasa-jhana* で、前に止住する知識。前、は過去の時間で、ことにここでは前世、すなわち今の世に生れる以前の時間を指す。前世に止住する知識、とは前世のことが今世にそっくり維持されている知識と言うことで、記憶といっても、想起といってもよい。

シュローカ(28)の「記憶」の原語は、動詞 *smi* (心に止める、想起する、記憶する) に由来する。「記憶

ゆたかに」とは、たんに記憶力旺盛なことを指すのではなく、前世のことを想起する能力のゆたかなことをいう。神秘的で、人によっては荒唐無稽と吐きだすかもしれない。しかし、西洋哲学の祖と言われるソクラテスが、プラトンの「メノン」篇で語っている「想起」アナムネーシスは、ここの「宿命通」や「記憶」と、かなりよく似ているのではないだろうか。以下ソクラテスの言葉は、藤沢令夫訳。

青年メノンが、ソクラテスに問う「人間の徳性は人に教えられるものか、訓練によって修得するものなのか、生れつきあるいは他の何かの仕方によるのか」と。長い問答がつづき、やがてソクラテスがいう。

：こうして、魂は不死なるものであり、すでにいくたびとなく生れかわつてきたものであるから、そして、この世のものたるとハテスの国のものたるとを問わず、いっさいのありとあらゆるものを見てきているのであるから、魂がすでに学んでしまっていないようなものは、何ひとつとしてないのである。だから、徳についても、その他のいろいろの事柄についても、いやすくも以前にもまた知っていたところのものである以上、魂がそれらのものを想起することができるのは、別に不思議なことではない。なぜなら、事物の本性というものは、すべて互いに親近なつながりをもっていて、しかも魂はあらゆるものをすでに学んでしまっているのだから、もし人が勇気をもち、探求に倦むことがなければ、ある一つのことを想起したこと——このことを人間たちは「学ぶ」と呼んでいるわけだが——その想起がきっかけとなって、おのずから他のすべてを発見するということも、充分にありうるのだ。それはつまり、探求するか学ぶとかいうことは、実は全体として、想起することにほかならないからだ。